

慧浄述『妙法蓮華經續述』の敦煌本について

金 炳 坤

1 はじめに

智顛説・灌頂述『妙法蓮華經文句』（T34, 30a2-11）では、『妙法蓮華經』に出ずる「種種因縁、種種信解、種種相貌」（T9, 2b22）のうち、初後の二者について釈しているが、その末注である湛然述『法華文句記』では、ここに対する異説として「他人は此ここに於いて離するに三門と為す。謂わく、因縁門、信解門、相貌門なり（他人於此離為三門。謂因縁門。信解門。相貌門）」（T34, 198a12-13）という一文を挙げている。

この説は、おそらく吉蔵撰『法華義疏』（T34, 471b5-12）に出ずるものと考えられるが、その後の末注である従義撰『天台三大部補注』では、この他人に対して「大唐の時、嘉祥・紀国・安国・慈恩等、並な『法華疏』有り、故に此の説有り。今は既に伝わらず、為めに尋索し難し（大唐之時嘉祥紀国安国慈恩等並有法華疏故有此説今既不伝難為尋索）」（X28, 229b8-9）と注し、唐代でも是くの如き主要な『法華疏』等の所説であろうが、いまは伝わらないためにこれを判じ得ないとするのである。おそらくは唐代きっての『法華經疏』に対する従義の認識が反映されている一文になろう。

しかしながら、紀国寺慧浄や安国寺利渉はともかくとして嘉祥や慈恩の『法華疏』までもがいわば逸書扱いにされているところは、従義（1042-1091）の置かれていた時代や地域、さらには趙宋天台の教勢といった様々な状況について二三考えさせられるものがある。

すなわち、『仏祖統紀』の「諦観伝」などからも知られているように「唐の末に教籍海外に流散して、今復た存せず（唐末教籍流散海外。今不復存）」（T49, 206a21-22）といった状況が宋初に至るまでもさほど改善されていなかったということであろうか。それとも単に従義の典籍収集能力に限度のあったことを示しているのであろうか。

筆者は後者に重きをおいてみたいが、その理由は『高麗統蔵經』の刊行を念頭に義天（1055-1101）が著した『海東有本見行録』では、吉蔵・慧浄・窺基の『法華疏』が記載されており、また利渉や従義に関しては、余他の章疏が記載されているために、決して手に入らない状況ではなかったことが予想されるからである。

中でも、その一部（巻第一・二・五・六）が韓国に現存している慧浄述『妙法蓮華經續述』（以下、『續述』）は、巻第一と二のそれぞれの刊記に「寿昌元年乙亥歳（1095）高麗国大興王寺奉／宣彫造」（41張）、「寿昌元年乙亥歳大興王寺奉／宣彫造」（43張）とあることから読み取れるように、義天が蒐集した章疏類の刊行のために興王寺に設けられていた「教蔵都監」にその淵源をもつもので、まさしく従義と同時代において彼が蒐集したものが、いまに伝承され

ているのである。なお、韓国に現存する『續述』については、金炳坤2010「紀国寺慧浄の『法華經續述』考(1)：新発見の史料をもとに」『身延論叢』15：124-127を参照されたい。

2 敦煌における『妙法蓮華經續述』の受容について

筆者が敦煌文書の中から『續述』(BD03215)そのものを発見し、序品に同定していることについては、金炳坤2012「西域出土法華章疏について」『印度学仏教学研究』61-1：480において報告したとおりである。

そして、韓国に現存する『續述』からすると、卷第二・三・四・五(序品から譬喩品まで)に該当する内容を有するが、『續述』を簡略化しながら適宜に抄出している(擬題)『妙法蓮華經論義』(S.6494)を発見し、現存本(卷第二・五)との対応関係を示しつつ、引用されている経論の典拠をはじめ、章疏との影響関係を明らかにした、その翻刻全文を前掲の金炳坤[2010：109-146]及び金炳坤2012「紀国寺慧浄の『法華經續述』考(2)：韓国の現存本をもとに」『身延論叢』17：33-91において公開するとともに、敦煌文書との関係性については、『大正新脩大藏經』の古逸部に収録されている(擬題)『法華問答』(S.2662)において『續述』を含めS.6494との同文が頻出していることについて指摘している。

それから、金炳坤2013「西域出土法華章疏の基礎的研究」『仏教学レビュー』13：70-78においては、栖復集『法華經玄賛要集』(以下、『要集』)に散見される『續述』の逸文の中から、寿量品から不軽品に該当する15例を対象として、同じく古逸部に収録されている(擬題)『法華經疏』(S.4107)との対比により、うち13例がS.4107に見出されることから、S.4107が明らかに『續述』を受けていることを解明している。

かくして筆者によって明らかになった、敦煌における『續述』(BD03215)及びその関連文献(S.6494, S.2662, S.4107)の存在により、西域出土法華章疏の、中でも最大点数を占め、「浄法師云わく、初めの一品を序分と名づけ、次の十九品を正宗と名づけ、神力品の下に八品有るを流通と名づく(浄法師云初一品名序分。次十九品名正宗。神力品下有八品名流通)」(T34, 661b8-9)として『續述』以降の成立であることを明かしている『妙法蓮華經玄賛』(以下、『玄賛』)に比べても、これに勝るとも劣らない教学的展開が、確かに敦煌の地において行われていたことが裏付けられたのである。

そのほか『續述』に関する従来の研究成果については、上記の筆者によるものも含めて、櫻井唯2020「紀国寺慧浄の著作について」『論叢アジアの文化と思想』28：13-17に整理されているため、そちらを参照されたい。

ただし、櫻井氏は文末において「スタイン四一〇七は『法華經續述』そのもの、あるいは原典に忠実な抄出本と言えるのではないだろうか。ただ、わずかに二例とは言え、やはり『玄賛要集』の「紀国云」の引用と一致しない例があることは留意すべきである」と締めくくってい

るが、筆者がS.4107を指して『續述』を「受けている」に留め、「抄出本」とはしなかったもう一つの理由は、他疏との関係を考慮に入れていたからで、当時は余力もなく触れてもいないが、S.4107については、福原隆善1974「凝然と法華經」『印度学仏教学研究』22-2：689-690に凝然述『法華疏慧光記』に引用されている道栄或いは道策撰『法華疏』（以下、『道栄疏』）の逸文がS.4107に見出されることが指摘されている。この点については『道栄疏』が『續述』を受けていた可能性も視野に入れて今後さらに検討を加えていかなければならない。

なお、福原氏の対照では「たいへん類似点のある」文例として三例が挙げられているが、筆者の調査ではかなり長文にわたるもう一例のあることが、またS.2662においても『道栄疏』の逸文と同文が見出されることが新たに確認できた。『道栄疏』の逸文については、別稿に詳述することにしたい。

関連して現在進行中の研究課題も併せて二三付け加えておきたい。

まず『要集』については、本稿の注においても指摘しているとおり『要集』には典拠を明かさずに『續述』を引用している例が複数確認できたこと。この種の逸文集成は、さらなる『續述』関連文献の調査及び照合に役立てることができるものと考えている。さらに『要集』には奈良時代の入唐僧として知られている興福寺行賀（729-803）の『法華疏』の逸文が『續述』同様に多く集録されていること。これは中国人に及ぼした日本人の法華經觀を論ずる際に活かせるような新資料になり得るものと考えている。

次に敦煌文書からの新発見が期待される『法華經疏』として、波羅頗蜜多羅訳（630-633）『大乘莊嚴經論』や玄奘訳（660-663）『大般若波羅蜜多經』などの引用がみられることから、慧浄と同じ頃かそのあたりに活躍した人物であることが推定される道栄或いは道策の『法華疏』と、小寺文穎1974「凝然大徳にみられる利涉戒疏」『印度学仏教学研究』22-2：691-697において指摘されているように、『利涉法師勸善文』（S.3287h）や『利涉法師奏請僧徒及寺舍依定』（S.2679c）などが敦煌から発見されており、玄奘の門下でありながら『玄賛』に対して批判的であったことで知られている安国寺利涉の『法華疏』については、これから探索すべき文献として位置づけておきたい。

3 韓国の現存本と敦煌本の校訂について

これまで『續述』の中身については事あるごとに触れて論及してきたのであるが、いずれもが重箱の隅をつつくようなマイクロなもので、いまだ法華教学史という全体の大きな流れの中において『續述』の位相を定義づけるようなマクロなものではなかったのである。

散逸法華章疏という研究分野の限界でもあるが、この種の研究は、中国仏教史の中において展開されてきた教判論とも軌を一にするようなもので、既存の枠組みを踏襲しつつもそれを批判したうえで、それ独自の価値を強く印象づけるような特徴を打ち出していかなければ、どう

にも認知されづらいくらいがある。

それに、慧浄にとってはきっと面白くない、彼の行く手を阻むような出来事が起こっていたのである。しかしそのことは、慧浄にとっては不都合であったも、東アジア仏教史においては鳩摩羅什已來の盛り上がりを見せた出来事であったに違いない。それはつまり、新訳仏教という名の下に華々しく登場してきた玄奘の存在であった。この時点で、すでに慧浄の名声は玄奘という光の前に影を潜めることになったのである。それが慧浄教学の継承者の不在という事態を招いたことは、中原ではなく、むしろ辺境の地である敦煌において彼の著作が発見されている現況からしても窺われるところである。ただし、彼をの不遇はこれまでのことで、これから次第に変わっていくものと考えられる。

その第一歩として本稿では、この種の研究を組上に載せるところから始めるべく、その土台となるテキストのデジタル化も見据えた使えるテキストを目指して、まずは筆者の発見によりようやく異本をもつようになった『續述』の、韓国の現存本（以下、原本）と、敦煌本（以下、甲本）を用いて、両本の校訂を行うとともに、甲本の残存範囲内に収まる限定的なものではあるが、注において経論章疏との対応関係を示す、筆者ならではの手法を加味することによって、テキストの性格や背景について論ずるための基礎資料を学界に提供することにしたい。

なお、韓国に現存する版本よりも敦煌より発見された写本の方が成立は早いものと推定されるが、全228行を有する写本には中においても欠損箇所があり、版本の方が状態の良い善本であるため、前者を原本とし、後者を甲本にして、その校異は注に記すことにした。

【凡例】

- ・原本は、韓国の松廣寺聖宝博物館に収蔵されている「妙法蓮華経續述卷第二」（従二十四張至三十三張）のカラー画像を用い、かつて韓国の文化財庁の国家記録遺産ポータルサイトに公開されていた翻刻文を参照した。校訂テキストに用いた [2.24r6] という表記は、卷第二（以下、[2.] は省略）の第24張表面の第6行目を表し、[32v9] という表記は、第32張裏面の第9行目を表す。資料の利用を許可していただいた松廣寺聖宝博物館の関係者各位に厚く御礼申し上げます。
- ・甲本は、中国国家図書館に収蔵され、「北六二〇二號（致十五）法華経解」というタイトルで『敦煌宝蔵』第97冊（290b-295a）に収録されているマイクロフィルムの紙焼きによる影印を用い、国際敦煌プロジェクト（IDP）に公開されているカラー画像を参照した。校訂テキストに用いた [1] という表記は、第1行目を表し、10行ごとにこれを付した。また [*291a] という表記は、マイクロフィルムの各コマの始まりを表すマーキング（*）と『敦煌宝蔵』の頁数（aは上段、bは下段）を組み合わせた表記である。
- ・踊り字・異体字（「或=惑」「郭=障」「躰=體」「卅=三十」等）は正字に改めた。囲い線

- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.2.2.1.3.3.1.2. 精進定（【續】 24r5, 24r6）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.2.2.1.3.3.1.3. 念定（【續】 24r6, 24r7）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.2.2.1.3.3.1.4. 思惟定（【續】 24r6, 24r7）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.2.2.1.3.3.2. 習相（【續】 24r5・24r12）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.2.2.1.3.4. 習修果・習修得果（【續】 23v15-24r1, 24v10【妙】得五神通3a22）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.2.2.2. 頌解用（【續】 23v10, 27v7【妙】又見菩薩3a22f）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.2.2.2.1. 頌解能讚仏（【續】 27v8【妙】又見菩薩3a22f）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.2.2.2.2. 頌解能問法（【續】 27v8, 27v12【妙】復見菩薩3a24f）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.2.2.2.3. 頌解能化僧（【續】 27v8, 28r1【妙】又見仏子3a25f）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.3. 頌種種相貌・頌現相貌（【續】 22r2, 28r3-4【妙】又見菩薩3a28f）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.3.1. 現捨樂相（【續】 28r4, 28r7【妙】又見菩薩3a28f）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.3.2. 現拔苦相（【續】 28r4-5, 28r9【妙】又見菩薩3a29f）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.3.3. 現精進相（【續】 28r5, 28r11【妙】又見仏子3b1f）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.3.4. 現持戒相（【續】 28r5, 28v1【妙】又見具戒3b3f）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.3.4.1. 持戒人（【續】 28v2, 28v3【妙】又見具戒3b3）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.3.4.2. 持戒相・現戒相（【續】 28v2, 29r11【妙】威儀無欠3b3）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.3.4.3. 顯戒德（【續】 28v2, 30r10【妙】淨如宝珠3b3）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.3.4.4. 覓戒果（【續】 28v3・不説【妙】以求仏道3b4）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.3.5. 現忍辱相・忍相（【續】 28r6, 30r11【妙】又見仏子3b4f）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.3.6. 現修定相（【續】 28r6, 30v11【妙】又見菩薩3b6f）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.3.7. 現行檀相（【續】 28r6, 30v15【妙】或見菩薩3b9f）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.3.8. 現學慧相（【續】 28r7, 31r7【妙】或有菩薩3b15f）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.3.8.1. 現說一乘慧（【續】 31r7, 31r9【妙】或有菩薩3b15f）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.3.8.2. 現觀一乘慧（【續】 31r7, 31v3【妙】或見菩薩3b17f）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.3.8.3. 現求一乘慧（【續】 31r8, 31v11【妙】又見仏子3b18f）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.2. 頌仏去後菩薩・頌仏去世菩薩（【續】 21v14-15, 31v15【妙】文殊師利3b19f）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.2.1. 頌依身供養菩薩（【續】 31v15-32r1, 32r1【妙】文殊師利3b19f）
- 1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.2.2. 頌起塔供養菩薩（【續】 32r1, 32r3-4【妙】又見仏子3b21f）
- 1.2.3.1.2.3. 請答（【續】 19r4・32r8【妙】仏放一光3b29f）
- 1.2.3.1.2.3.1. 牒奇（【續】 32r8, 32r9【妙】仏放一光3b29f）
- 1.2.3.1.2.3.2. 發問（【續】 32r8, 32r11【妙】我等見此3c2f）
- 1.2.3.1.2.3.3. 催答（【續】 32r8, 32r12【妙】仏子時答3c5f）
- 1.2.3.1.2.3.4. 結請（【續】 32r9, 32r14【妙】示諸仏土3c8f）

1.2.3.2. 答成分・能答人成 (【續】 1r4, 17r14, 32r15 【妙】 爾時文殊3c11f 【論】 2r2-3, 10v1f)

1.2.3.2.1. 序說 (【續】 32r15, 32v1 【論】 10v1f)

1.2.3.2.1.1. 見過去二相 (【續】 32v1, 32v2 【論】 10v2, 10v3f)

1.2.3.2.1.2. 成就十事 (【續】 32v1, 32v4 【論】 10v2, 10v6f)

1.2.3.2.1.2.1. 举名 (【續】 32v4, 32v5 【論】 10v7f)

1.2.3.2.1.2.2. 积義 (【續】 32v4, 32v9 【論】 10v7f)

1.2.3.2.1.2.3. 開章 (【續】 32v4, 33r7 【妙】 爾時文殊3c11f 【論】 10v7f)

4 妙法蓮華經續述卷第二 (從二十四張至三十三張)

1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.2.2.1.3.3.1. 調心

[24r6] [1] ⁴定。四思惟定。

[24r6] 欲定者。修時起欲樂。精進定者。修時拔退沒。念定者。修時攝驚怖。思惟定者。修時了得失。此法是修時。此法非修²時。修此四足。須離四失。一高。二下。三沒。四散。若欲共調相應名高。共懈怠相應名下。共睡眠相應名沒。共愛染相應名散。進念慧三亦爾。高³則不靜。下則廢退。沒則內昏六識。⁴散則外馳六塵。離此四失。則不高不下不沒不散。心則調柔。此出⁵身子論。莊嚴論有別解。如⁶彼釋。

1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.2.2.1.3.3.2. 習相

[24r12] 習相者。謂修樂相。先以身定心。思惟身無常得定。身樂身輕。苦空無我亦爾。⁷次以心定身。思惟心無常得定。心樂心輕。苦空無我亦爾。⁸如是成初禪時。此身離生⁹喜樂。津液遍滿。如 [24v1] 入溉田。水從外入。離生^{*}喜樂亦爾。成二禪時。此身定生^{*}喜樂。津液遍 [10] 滿。如山澆池。水從內出。定生^{*}喜樂亦爾。成三禪時。此身無^{*}喜之樂。津液遍滿。如優鉢羅花。出泥未出水。若根若頭。水皆遍行。無喜樂亦爾。成四禪時。此身淨心遍滿。如著淨衣。無不覆處。淨心遍行亦爾。問。¹⁰云何津。云何液。¹¹云何遍。云何滿。答。住禪初證名津。漸行未廣名液。雖廣未到彼岸名遍。能到彼岸齊是名滿。¹²復次津液遍滿。義一名異。如佛告比丘見苦時。生智生眼生明生覺。不可說異。此四亦爾。如是善修四禪起通自在。如人平治四衢繫馬縱任。是名深修禪定 (3a22)。

1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.2.2.1.3.4. 習修果・習修得果

[24v10] 得五神通 (3a22) 者。習修得果也。

[24v10] 菩薩或言得五。或言得六。¹³言得五者。約習未盡。言得六者。約使已盡。此如¹⁴智度論說。

[24v12]¹⁵六通者。一神足。二天眼。三天耳。四他心。五宿命。六漏盡。神足者。亦名如意成。亦名身通。自在不¹⁶測名神。爲因爲分稱足。神目定果。足目定因。此自在依身轉。故曰身通。此自在如心意。〔20〕故名如意成。天眼者。¹⁷天是淨義。眼是見義。此眼用〔25r1〕天中。淨根爲體。此體非通。通依此體。故名天眼通。天耳亦然。但耳是聞。義爲異耳。他心者。彼人集起。名曰他心。此通緣他心。故曰他心通。宿命者。¹⁸宿是宿素。命是性命。此通緣宿素¹⁹性命事。故²⁰名宿命通。漏盡者。煩惱名²¹漏。涅槃名盡。何人得漏盡。所謂無學。此通〔*291a〕緣漏盡。亦在漏盡身。故名漏盡通。

[25r6] 此六總名神通者。冥隱難²²測爲神。神懷虛暢爲通。²³神通卽從境爲名。神足如意從因爲名。何者四神足。本目定因。不目定果。此通從四神足生。故名神足。如意成亦爾。故十願中說如意。從方便作名天眼天耳通。並從因得名。因有二種。一生因。謂無礙道。二依因。謂²⁴眼耳根。依是別因。生是通因。從別不從通也。若爾何故婆沙云。²⁵天眼天耳是通果。故名通。答。眼耳識。相應慧。是通體。眼耳根。非通體。通成彼則〔30〕成故言是通果。此謂相成因果也。天眼通亦名生死智。若眼識緣現在命終及受生。生死則從境爲名。若因天眼通²⁶生意地生死智。緣未來生死者。則從果爲名。此如²⁷雜心續〔25v1〕述。十力中解他心通。若言此通。何故名他心。則從境爲名。若言何故言心。不言數則方便建立。宿²⁸命通者。一向從境爲名。漏²⁹盡者。若以緣盡³⁰爲境。則從境得名。若以在³¹盡身中。則依位建立。

[25v4]³²長耳云。六通前五各有五種。一呪五。二藥五。三仙五。四報五。五修五。呪五者。持五種摩伽羅呪。得五神通。有呪則有。無呪則無。呪力勢分。唯及於五不及第六。以漏盡是實行故。藥五者。服五種藥。而得五通。還如持呪。仙五者。不因呪藥。復非報修。忽然有者。名靈³³仙通。報五者。六道生處法爾酬因。有報則有。無報則無。如天龍等。故名報〔40〕通。修五者。度惑方成由修定得。故名修通。

[25v10] 此中所明是修得。五通修得。有二種。一離欲得。二方便得。然諸通是解脫道。譬如沙門果並不能斷障。雖不斷障必由離障。方得障。有二種。一使障。謂正使煩惱。二擁障。謂習氣無知。此二亦名惑障定障。離使障。有少分離。有畢竟³⁴離。若畢竟離欲時得者。制離欲得。若畢竟離欲時不得。別離擁障得者。名方便得。此約神通爲語耳。若餘功〔26r1〕德分離使障。及伏惑位中得者。亦屬方便得。然離欲得自有三時。一離下地欲時得。二離自地欲時得。三離上地欲時得。此〔*291b〕由障法有三。一遮障。謂下惑障上。二翳障。謂同地相障。三³⁵影

障。謂上惑障下。離下地欲³⁶時得。是離遮障。³⁷離自地欲時得。是離翳障。離上地欲時得。是離影障。

[26r5] 六通中。神足宿命離遮障時即得。漏盡通離影障時方得。他心通離三障時皆得。眼耳二通離三障時皆不得。故雜心〔50〕云。³⁸此無記性故。不入淨無漏味相應。是故得彼三種禪時。不得方便已乃現在前也。離擁障有二種。一離世障無知。二離法障無知。障知過未謂世障。障知現在謂法障。故成實云。³⁹世障故不知。過去未來法智。案。成實法智⁴⁰知。現在不離世障。故不知過未也。

[26r12] 六通中。前五通離擁障得。漏盡通不離擁障得。前五中宿*命通離世障得。神足天眼他心離法障得。天眼。若知現在離法障得。若知未來⁴¹離世障得。二得⁴²一四句。漏盡通唯離欲得。眼耳通唯方便得。餘三通具二得。報⁴³通〔26v1〕非二得。俱舍云。⁴⁴此五通。若餘生所數習。則由離欲得。若別勝由修行⁴⁵得者。是總語耳。三通。若餘生曾委悉熟修則離欲得。若未曾熟修則方便⁴⁶得。眼耳二通。⁴⁷一向方便得也。

[26v3] 問。方便法云何。答。得本禪已別修方便身通。修輕相天眼。修明相天耳。修聲相他心。修身心相宿命。修位差別相。長耳制件明修。神足天眼天耳。各一千〔60〕八十方便。宿命八十。他心六。

[26v6] 相神足一千八十者。神足法中事有六件。一遠近。二出沒。三多少。四小大。五有無。六輕重。六件各三變。一自身⁴⁸遠近變。二他身*遠近變。三自他身*遠近變。乃至輕重三變亦爾。三六合成十八變。入地履水放光⁴⁹捫日等。是神足差別事。非開十八本法門。即此十八。從偶離羈有三十六方便。前*遠近三變是偶。今離遠近。各起三變。一自身近變。二他身近⁵⁰變。三自他身近變。遠變三。一自身遠變。二他身遠變。三自他身遠變。乃至輕重。亦各起三變。偶變成三。既⁵¹三十六十八。羈⁵²變成六。即六六三十六變。即此三十六方便。〔*292a〕意欲自在遠近并一時。復各三階。一近。二遠。三近遠變。上三十六故有〔70〕一百八方便。欲⁵³遍自在轉〔27r1〕方便門一方。有一百八十方。即一千八十也。

[27r1] 次天眼一千八十者。⁵⁴法本門中六種假觀。一日。二月。三星。四珠。五炬。六燈。此六是修天眼方便。復以六法變六方便。一從明取暗。二從暗取明。三從明取明。四從暗取⁵⁵暗。五暗取明暗。六明⁵⁶取暗明。一一方便。各有六轉。如日具六轉。乃至燈轉亦爾。六六則三十六方便。意⁵⁷欲自在。一近。二遠。三近遠變。此三十六。即一百八方便。以十方變之。即一千八十。

[27r7] 次天耳一千八十者。本法四階。⁵⁸一震。二烈。三⁵⁹孔。四⁶⁰響。三法變之。如震。一震。二遍震。⁶¹三等遍震。乃至響亦爾。三變四爲十二。十二復三階。一因受四大聲。⁶²二非因受四大聲。三因俱聲。三變十二。卽三十六方便。意欲自在。一近。二遠。三近遠。三變三十六。卽一百八。以十方變之。卽一千八十。

[27r12] 次宿命八十方便者。却惟過去。分爲三位。遠爲前。次〔80〕爲中。近爲後。三位復爲十轉。一從前取中。二從中取後。三從後取中。四從中取前。五前後取中。六中取前⁶³後。七前中取後。八後取前中。〔27v1〕九後中取前。十前取中後。此十轉⁶⁴中。復有八事。一名。二生。三⁶⁵姓。四飲食。五苦。六樂。七壽命。八長短。名爲八事。六種同行。意欲自在。變此八事。於⁶⁶十門中。逆順縱任。卽有八十。初學但次第不逆後意自在故。逆順融會也。

[27v4] 次他心六相者。他心方便。一取色相。二取心相。自他相乘合有六相。一自色取他心。二自心取他色。三他色取自心。四他心取自色。五自心取他心。六自色取他色。略⁶⁷示修方便法如此。

1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.2.2.2. 頌解用

[27v7] 次四偈。頌解用。三重。初一偈。頌解能讚佛。次一偈。頌解能問法。後兩偈。頌解能化僧。

[27v8] 初偈言。又見菩薩（3a22）者。讚佛人。安禪合掌（3a23）者。讚佛相。住心名禪。謂安住於心。合掌專一也。以千萬偈（3a23）者。讚佛智。⁶⁸大哉大悟大聖〔90〕主。無我無染無所著。天人象馬調御師。道風德香熏一切。如是等。讚諸法王（3a23）者。讚佛體。法王義。藥草品解。

[27v12] 問法偈云。復見菩薩（3a24）者。問法人。智深志固（3a24）者。問法因。智深故能⁶⁹深問。志固故不⁷⁰壞問。能問諸佛（3a24）者。問法力。如〔*292b〕問云何得長壽等。聞悉受持（3a25）者。問法果。信力大故悉能受。念力大故悉能〔28r1〕持。

[28r1] 化僧兩偈。⁷¹初偈云。⁷²定慧具足（3a25）者。圓力化。以無量喻（3a26）者。開解化。爲衆講法（3a26）者。上首化。欣樂說法（3a26）者。不退化。⁷³化諸菩薩（3a27）者。簡機化。破魔兵衆（3a27）者。降障化。而擊法鼓（3a27）者。遠聞⁷⁴化。

1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.3. 頌種種相貌・頌現相貌

[28r3] 次頌現相貌。十五偈半。八重。初一偈。現捨樂相。第二一偈。現拔苦相。第三一偈。現精進相。第四一偈。現持戒相。第五一偈半。現忍辱相。第六兩偈。現修定相。第七五偈。現行檀相。第八三偈。現學慧相。

[28r7] 捨樂偈云。⁷⁵又見菩薩(3a28)者。捨樂人。寂然宴默(3a28)者。捨樂相。身不動爲寂[100]然。口不動爲宴⁷⁶嘿。天龍恭敬(3a28)者。遇樂境。不以爲喜(3a29)⁷⁷者。捨樂心。

[28r9] 拔苦偈云。⁷⁸又見菩薩(3a29)者。拔苦人。處林放光(3a29)者。拔苦力。濟地獄苦(3b1)者。拔其苦。令入佛道(3b1)者。與其樂。

[28r11] 精進偈云。⁷⁹又見⁸⁰佛子(3b1)者。⁸¹舉進人。未嘗睡眠(3b2)者。離進障。經行林中(3b2)者。現進相。⁸²勤求佛道(3b2)者。⁸³覓進果。睡眠是精進障。樂著前境爲睡。身心昏昧爲眠。⁸⁴眠有三種。一從飲食生。二從時節生。三從心生。前二以精進斷。後一以思惟斷。諸羅漢眠不從心生無所蓋故。如阿菟樓駄說。我初盡漏得[28v1]不從心眠。于今五歲十五年。中斷食眠時節臥已二十⁸⁵年。

1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.3.4. 現持戒相

[28v1] 持戒偈云。⁸⁶又見具戒(3b3)者。持戒人。威儀無缺(3b3)者。持戒相。淨如寶珠(3b3)者。顯戒德。以求佛道(3b4)者。覓戒果。

1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.3.4.1. 持戒人

[28v3] 初言具⁸⁷戒者。具有二義。一自[110]性具。二品類具。⁸⁸自性具者。四德成就。一從他⁸⁹正受。二善淨心受。三犯已能悔。四專精不犯。前二是法。後二隨法。受戒隨戒。攝一切戒。案。法者是戒。初由三業得故。初起三業名爲法。隨者是持。後由三業修故。後起三業名隨法。受隨不越三業故。以受隨爲戒性。⁹⁰二品類者。卽三聚戒。一攝正護戒。卽七衆所受戒。二攝善法戒。從正護後爲得大菩提。生長一切善法。三攝衆生戒。謂安立衆生善道及三乘。⁹¹此[*293a]三戒五根爲因。三根爲別因。進根爲⁹²攝護戒因。智根爲攝善戒因。定根爲⁹³攝生戒因。二根爲通因。信根念根通爲三戒因。此三戒以善。身口意爲體。案。聲聞戒以身口業爲體。非意業。菩薩戒。具以三業爲體。若薩婆多部。身口是色聲。若經部及大乘。三業俱意。思[120]非色聲。五塵非罪福故。此義云何。思有二種。一先引思。二隨事思。以[29r1]先引思爲意業。以隨事思爲身口二業。若無教。⁹⁴或以二思功能爲體。⁹⁵或以不作爲量。說是色者。從因爲名。然攝護戒。以捨惡三業爲能離。一切惡法爲⁹⁶所離。攝善戒。⁹⁷以求善三業爲能攝。一切善法

爲所攝。攝生戒。以利他三業爲能攝。一切衆生爲所攝。此中皆以能離⁹⁸能攝爲戒體。所離⁹⁹所攝非戒體。此三戒以離取爲類。案。初戒以離爲類。後二戒以取爲類。莊嚴論說。¹⁰⁰初戒以禁防爲體。後二戒以勤勇爲體。卽此義也。此三戒。正護戒。能令心住爲用。攝善戒。能成¹⁰¹就佛法爲用。攝生戒。能成*就衆生爲用。正護戒。爲斷德因。攝善戒。爲智德因。攝生戒。爲恩德因。今見彼菩薩自性及品類。皆圓滿故。言又見具戒。

1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.3.4.2. 持戒相・現戒相

[29r11] 威儀無缺 (3b3) [130] 者。現戒相。解脫道論云。¹⁰²戒相者。威儀除非威儀。非威儀者。謂三破法。一破木¹⁰³叉法。謂無慙無愧。於如來離信。二破緣法。謂命與形筋相。應離於知足。三破根法。謂不閉六根離於念慧。此三覆非威儀。是名戒相。¹⁰⁴眞諦解犯律儀戒有三心。一¹⁰⁵意欲失。如爲生天。¹⁰⁶如爲姪欲。[29v1] 持戒卽犯。二威儀失。雖不故作不憶。是罪故犯。如不閉戶眠等。三具二失。謂¹⁰⁷具上二失所作犯戒。第一第三重第二¹⁰⁸輕。輕尙無缺。況於重也。

[29v3] 問。菩薩住律儀有幾波羅夷。答。地持說。¹⁰⁹有四。一貪利。故自¹¹⁰嘆毀他。二慳財慳法。三嗔心打罵。四誘菩薩藏。於四犯一。是名波羅夷。¹¹¹善戒經說。¹¹²菩薩。在家有六重。出家有八重。案。在家二衆。受菩薩戒則六重。除姪及妄語。姪不制故。妄語或〔*293b〕時須行故。若出家五衆。受菩薩戒則八重。具比丘四重故。

[29v8] 問。菩薩犯重爲〔140〕失戒爲不失戒。答。犯菩薩四重。有失不失。犯比丘四重。失木叉戒不失菩薩戒。故地持說。¹¹³有二因緣。菩薩失律儀戒。一捨本願。二上煩惱犯。若非二因緣犯。捨身受身。雖不憶念。數數更受猶是本戒。不名新得。案。菩薩四重。上犯失戒。重受新得。軟中犯者不失。重受但是本得。戒經。¹¹⁴菩薩若犯比丘四重。亦失木叉戒。污菩薩戒。案。此犯比丘四重。失比丘戒。不失菩薩戒。但污菩薩戒。依此義比丘爲菩薩則三聚別起。若不爾〔30r1〕菩薩失木叉。卽失菩薩律儀。但污二聚戒菩薩律儀。應更受別得無此理故。卽以此義證菩薩命終失比丘律儀。不失菩薩律儀。如住八戒人。受比丘戒。夜盡八戒失。大戒不失。此亦如是。

[30r4] 問。菩薩云何犯攝善戒及攝生戒。答。¹¹⁵攝¹¹⁶善攝生戒以勤勇爲體。不勤不勇則是犯。如地持說。¹¹⁷菩薩於一日一夜中。若於三寶不少多供〔150〕養乃至不一禮。不以一偈讚。不一念淨心者。是犯衆多犯。是犯染污起。若¹¹⁸懶惰懈怠犯。是犯非染污。若忘¹¹⁹誤犯。非染污起。如是等。廣如¹²⁰彼論說。今見彼菩薩。於三聚威儀。並無缺犯。是名持戒相。

1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.3.4.3. 顯戒德

[30r9] 淨如寶珠 (3b3) 者。顯戒德。¹²¹珠以無類無瑕爲淨。戒以無缺無犯爲淨。又戒德有三。一清淨如珠。二圓滿如珠。三可重如珠。

1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.3.5. 現忍辱相・忍相

[30r11] 忍相偈云。¹²²又見佛子 (3b4) 者。住忍人。住忍辱力 (3b4) 者。安忍地。¹²³阿含經有六種力。小兒以啼爲力。欲有所索必先啼故。女人以嗔爲力。欲有所索必先嗔故。國王以嬌豪爲力。羅漢以精進爲力。諸佛以¹²⁴大悲爲力。比丘以忍爲力。¹²⁵莊嚴論說。忍有三種。一他毀忍。[30v1] 以不報爲性。二安苦忍。以耐爲性。三觀解忍。以智爲性。此中見彼以他毀忍爲相故。言住忍辱力也。增上慢人¹²⁶惡罵捶打 (3b5) 者。遇忍境。¹²⁷*惡罵是口〔160〕毀。捶打是身毀。皆悉能忍 (3b5) 者。現忍力。忍力得起由三思五¹²⁸想。三思者。一思他毀是我自業。若報則重自造苦。不由於他。二思彼我俱是行〔*294a〕苦。彼以無知於苦加苦。我今有知。云何復爾。三思聲聞自利。尚不以苦加人。菩薩利他。豈得以苦加物。五想者。一修本親想。捨怨想。一切衆生久來無非親屬故。二修法想。離生*想。罵者打者不可得故。三修無常想。離常想。衆生性是死法。尚不應嗔。況加害故。四修苦想。離樂*想。衆生不離三苦。止應令離。不應加故。五修攝取想。離他想。本願令樂。不令苦故。由此三思五想。卽於他毀能忍。忍之不動爲力。以求佛道 (3b6) 者。覓忍果。

[30v11] 定*想兩偈。¹²⁹初偈離亂相。後偈現定*想。初偈云。又見菩薩 (3b6) 者。離亂人。離諸戲笑 (3b6) 者。離亂事。及癡眷屬 (3b7) 者。離亂因。親近智者 (3b7)¹³⁰者。狎定緣。後偈云。一心除〔170〕亂 (3b7) 者。破定障。攝念山林 (3b8) 者。現定¹³¹相。億千萬歲 (3b8) 者。積定力。以求佛道 (3b8) 者。覓定果。

[30v15]¹³²擅相五偈。¹³³卽爲五重。一偈藥〔31r1〕食施。一偈衣服施。一偈臥具施。一偈園林施。一偈總結施。藥食偈云。餽餽¹³⁴飲食 (3b9) 者。¹³⁵俗典云。草菜謂之蔬。菜餽謂之藪。此卽生者爲蔬。熟者爲藪。¹³⁶涅槃明純陀持諸餽餽來亦爾。非菩薩持肉餽而獻佛也。衣服偈云。¹³⁷名衣上服價直千萬 (3b10) 者。如此¹³⁸土迦葉上佛¹³⁹袈裟¹⁴⁰眞十萬兩金。亦如祇域奉佛¹⁴¹染摩羯篋衣亦直十萬兩金。佛勅阿難裁爲袈裟。¹⁴²彼亦如是。¹⁴³餘文可解。

1.2.3.1.2.2.2.3.3.2.1.3.8. 現學慧相

[31r7] 慧相三偈。三重。初偈現說一乘慧。次偈現觀一乘慧。後偈現求一乘慧。說是後得智。說自性性。觀是正體智。觀引出性。求是加行智。求至果性說。

[31r9] 一乘偈云。或有菩薩（3b15）者。說乘人。說寂滅法（3b16）者。示乘性。謂示諸法從本來常自寂滅〔180〕相（8b25）。此在道前。即自性¹⁴⁴性。種種教¹⁴⁵詔（3b16）者。開乘義。謂開五義。照明寂滅。五義者。一無性。二無生。三無滅。四本來寂靜。五自性涅槃。無性有三。一自無。謂未來諸法。由不自起屬因緣故。二體無。謂過去諸法。已滅不復起故。三不住無。謂現在諸法。刹那刹那體不住故。此三種無自性。遍一切有爲法。¹⁴⁶若無性則無〔31v1〕生。若無生則無滅。¹⁴⁷若無生滅則本來¹⁴⁸寂靜。若本來寂靜則自性涅槃〔*294b〕。如是前前爲後¹⁴⁹後依止。此義得成。故曰種種教詔。無數衆生（3b16）者。被乘機觀。

[31v3] 一乘偈云。或見菩薩（3b17）者。觀乘人。觀諸法性（3b17）者。觀乘性。¹⁵⁰法名涅槃。性名本分種。此在道中。即引出性。無有二相（3b17）者。觀乘行。¹⁵¹謂觀五種。無二相。一非有非無。非有者。分別依他二相無故。非無者。眞實相有故。二非如非異。非如者。分別依他相無一實體故。非異者。彼二種如無〔190〕異體故。三非生非滅。由無爲故。四非¹⁵²增非減。由染¹⁵³靜二法起時滅時法界正如是住故。五非淨非不淨。非淨者。自性無染不須淨故。非不淨者。客塵去故。五無二相。是第一義相。作如是觀。猶如虛空（3b18）者。觀乘譬求。

[31v11] 一乘偈云。又見佛子（3b18）者。求乘人。心無所著（3b18）者。離乘障。著有四種。¹⁵⁴謂著界著地著分著乘。離此四種。故曰心無所著。四著方便品釋。以此妙慧（3b19）者。求乘智。¹⁵⁵則無著是妙慧。求無上道（3b19）者。求乘果。此在道後。即至果性。

1.2.3.1.2.2.2.3.2.2. 頌仏去後菩薩・頌仏去世菩薩

[31v15] 次頌佛去世菩薩七偈。兩重。初一偈。頌〔32r1〕依身供養菩薩。後六偈。頌起塔供養菩薩。初云佛滅度後供養舍利（3b20）者。¹⁵⁶如釋迦滅¹⁵⁷後。從娑羅林輦尸。於天冠寺七日供養。迦葉來後方闍維之。供養碎骨方乃起塔。¹⁵⁸彼亦如是。次頌起塔。六偈六重。一頌數多。二¹⁵⁹頌量大。三頌嚴勝。四頌供恒。五頌顯〔200〕意。六頌斷疑。前五可解。斷疑者。疑曰上言起塔。嚴飭國界。何成起塔。供養佛身。¹⁶⁰今明起塔元供¹⁶¹養佛身。而國界自然嚴麗。如花開元爲結實。而樹王自然嚴好。

1.2.3.1.2.3. 請答

[32r7] 次佛放（3b29）下。八偈請答。四重。初兩偈牒奇。次兩偈發問。次兩偈催答。後兩偈結請。四章各兩。即爲八¹⁶²意。牒奇兩者。一偈牒自國之奇。故曰見此國界種種殊妙（3b29-c1）。一偈牒他方之奇。故曰放一淨光照無量國（3c2）。發¹⁶³問兩者。一偈爲自發問。一偈爲他發問。爲自云。願決衆疑（3c3）者。¹⁶⁴願爲我決衆多之疑也。催答兩者。一偈候時催答。一偈¹⁶⁵付事催答。初¹⁶⁶云佛子時。答者。不令過時。失慈悲也。結請兩者。一偈依事結請。一

偈依人結請。

1.2.3.2. 答成分・能答人成

[32r15]〔*295a〕經曰。¹⁶⁷爾時文殊（3c11）至善男子等（3c12）者。自下¹⁶⁸以明答成分。兩重。一序說。二¹⁶⁹頌。

1.2.3.2.1. 序說

[32v1] 序中論主。¹⁷⁰明文殊以宿命智。現見過去二相。成就十事故。能答彌勒。

[32v2] 見過去〔210〕二相者。一見因相。謂自見己身。於彼¹⁷¹彼佛土修種種行事故。二見果相。謂自見己身。是過去妙光。於彼佛所聞此法門。爲衆生說故。

1.2.3.2.1.2. 成就十事

[32v4]¹⁷²次成就十事。四重分別。一舉名。二釋義。三開章。四合解。

[32v4] 第一舉名。論曰。¹⁷³一現見大義因成就。二現見世間文字章句甚深意因成就。三現見希有因成就。四現見勝妙因成就。五現見受用大因成就。六現見攝取¹⁷⁴諸佛法輪因成就。七現見¹⁷⁵堅實法輪因成就。八現見進入因成就。九現見憶念因成就。十現見自身所選事因成就。

[32v9]¹⁷⁶第二釋義。一大義者。謂恩義大故。謂見如來以大恩義。欲說大法故。二世間文字甚深意者。¹⁷⁷佛說三乘。有字無義。爲津重病。言近意遠。¹⁷⁸無常壞世間。不能信。無常病世間。不能解。故曰甚深意。三希有者。¹⁷⁹由此法甚深說人難值。¹⁸⁰經無量劫。或聞不聞。故曰希有。四勝〔220〕妙者。¹⁸¹二萬諸佛次第共弘。弘人衆多。故成¹⁸²就勝妙。五受用大者。五塵勝境世間受用一乘妙¹⁸³經。出世受用燈明。¹⁸⁴弘〔33r1〕道妙光稟化。稟化時長。故受用大。六攝取諸佛法輪者。¹⁸⁵妙光上稟下。授門徒法輪不絕。故曰攝取。七堅實法輪者。妙光傳道¹⁸⁶八子不退。故曰堅實。八進入者。¹⁸⁷非止不退更階上果。故曰進入。九憶念者。¹⁸⁸求名本忘因說復頌。故曰憶念。十自身所選事者。¹⁸⁹由昔所作今成我身。故曰所選事。此十通¹⁹⁰名¹⁹¹因成就者。由文殊見昔十事爲。答彌勒之因。見之自在。故言成就。

[33r7] 第三開章。第一。從¹⁹²是時文殊（3c11）至演大法義（3c13-14）。明大義因成就。第二。從諸善男子（3c14）至故現〔228〕斯瑞（3c17）。明甚深意因成就。第三。從諸善男子（3c17）至一切種智（3c26）。¹⁹³明希有因成¹⁹⁴

5 おわりに

かくして本稿では、慧浄述『妙法蓮華經續述』の内相研究につながる外相研究の手始めとして、金炳坤 [2010: 124-127] において紹介している韓国の現存本と、金炳坤 [2012: 480] において報告している敦煌本 (BD03215) を用いて、両本の校訂を行うとともに、全文に対する典拠を可能な限り調査して、その結果を注において示すことによって、テキストの性格や背景について明らかにすることに努めてきたのである。

最後に、あくまでも校訂の範囲に限定されるものではあるが、經論章疏との対応関係を通して知り得た事柄についてまとめておきたい。

慧浄の『續述』における經論章疏の引用については、「出～」「如～説」「～云」「故～云」「～説」「故～説」「～曰」などの形式で典拠が示されている場合は、単純にそれに従って確認を行う手順で済むのであるが、そうでない場合は、時間をかけて調べていくほかない。

前者については、注において指摘しているとおりであるが、中でも「婆沙云」に関しては、際どいところではあるが、玄奘訳 (656-659) により近いことが認められるために『續述』の成立年代をめぐる再検討が必要になると考えられる。ちなみに、「俱舍云」に関しては、真諦訳が用いられている。また、「解脱道論云」に関しては、慧浄の取舍選択による恣意的な引用例として指摘することができる。

後者については、典拠を明かさぬ引用として『無量義經』が指摘できるが、甲本の範囲外であれば、『無量義經』についてはすでに言及されているのである。章疏類については、栖復の『要集』に関しては第2章においてすでに指摘しているために割愛し、吉蔵、文軌、円弘、義一との先後関係や影響関係について概括しておきたい。

吉蔵 (549-623) 撰『法華義疏』との関係については、『續述』が『法華義疏』を参照していることが確認できた。その際、慧浄 (578-647-) は「彼亦如是」としてこれに依拠している旨を記しているが、これに当てはまらない、断らずに参照している例も確認できる。いずれにしても両疏の先後関係は、これで確定したことになるであろう。

文軌 (615-675) 撰『天請問經疏』との関係については、玄奘訳 (648) 『天請問經』に対する現存する唯一の注釈書とされる『天請問經疏』において『法華經續述』(又は『莊嚴論續述』) を引用したものと推定される同文が確認できた。これは慧浄と文軌の関係をはじめ、いまだ確定されていない『法華經續述』の成立年代や慧浄の没年を考えるうえで参考資料になるであろう。

基 (632-682) 撰『妙法蓮華經玄贊』との関係については、『妙法蓮華經優波提舍』(以下、『法華論』) に対して解釈を施す際に『續述』を参照していることが確認できた。両疏の影響関係については、今後の研究課題の一つとして『法華論』に対する解釈を中心として行っていこうと考えている。と同時に、基は『玄贊』のほかに『大般若波羅蜜多經般若理趣分述讚』にお

いて「浄法師」(T33, 27b20)として慧浄に言及しているが、基に及ぼした慧浄の影響についても、今後の研究が俟たれるところである。

円弘(733以前)注『妙法蓮華経論子注』(以下、『子注』)との関係については、改めて『子注』に『續述』に類似する文例が鏤められていることが確認できた。しかし、両疏の先後関係は依然として不明である。『續述』と義寂・義一撰(753年以前)『法華経論述記』(以下、『論述記』)の関係については、本稿の注においても指摘しているとおり、義一が慧浄の名を出しながら『續述』を引いていることから、その先後関係が確定できるが、『子注』にはそのような記述が確認できないため、これ以上は論及し得ないものがある。上三疏の関係については改めて論ずることにしたい。

本稿は、いずれ韓国に現存する『續述』の全文を公開していくための布石である。

注

- 1) 「首闕【甲】」。
- 2) 「時修－【甲】」。
- 3) 「則＝下【甲】」。
- 4) 「〔散〕－【甲】」。
- 5) 曇摩耶舎共曇摩崛多等訳『舍利弗阿毘曇論』卷第十三に「若比丘。欲定斷行成就修神足。令我欲不高不下不沒不散。前後常想行。前如後¹⁹後如前。晝如夜夜如晝。²⁰其心開悟無有覆蓋。修行明了以身定心。以心定身。樂想輕想舉身行。」[617n19: 後＝如【聖乙】、n20: 其＝甚【聖】](T28, 617c12-15)とあり、本箇所を参照したものとみられる。
- 6) 典拠不明。『大乘莊嚴経論』又は慧浄述『莊嚴論續述』十卷(逸書)のことか。
- 7) 「〔次〕－【甲】」。
- 8) 曇摩耶舎共曇摩崛多等訳『舍利弗阿毘曇論』卷第十三に「……成就初禪行。若身離生喜樂。津液遍滿。此身盡離生喜樂。津液遍滿無有減少。如善澡浴師善澡浴師弟子。以細澡豆盛著器中。以水灑已調適作搏。搏此搏津液遍滿。不乾不濕内外和潤。……成就二禪行。若此身定生喜樂津液遍滿。身盡定生喜樂。津液遍滿。無有減少。如大陂湖以山圍繞。水從底⁴涌出。水不從東西南北方來。⁵陂水自從底⁴涌而出。此⁵陂津液遍滿無有減少。……成就三禪行。若此身⁷無喜樂津液遍滿。此身無喜樂盡。津液遍滿無有減少。如優鉢羅池波頭摩池拘牟頭⁸池分陀利池。若優鉢羅花乃至分陀利花。從泥涌出。未能出水。此花若根若頭。水津液遍滿。從根至頭從頭至根。津液遍滿無有減少。……成就四禪行。若此身以清淨心遍解行。此身清淨無¹¹不遍處。如¹²男子女¹³人。著白淨衣。上下具足。從頭至足。從足至頭。無不覆處。……」[619n4: 涌＝踊【宋】【元】【宮】*、n5: 陂＝波【聖】【聖乙】*、n7: 無＋(苦)【三】【宮】、n8: 池＝陀【聖】【聖乙】、n11: 不＝所【宮】、n12: 男＝是【聖】、n13: 人＝子【三】【宮】【聖】【聖乙】](T28, 619a5-b12)とあり、本箇所を参照したものとみられる。

- 9) 「喜 = 熹【甲】*」。
- 10) 曇摩耶舍共曇摩崛多等訳『舍利弗阿毘曇論』卷第十四に「云何津。云何液。云何遍。云何滿。如比丘住禪時。離生喜樂。初生正起正起觸證。身離生喜樂爾時名津住禪時。離生喜樂。漸開微行。未能增廣。身離生喜樂。爾時名液住禪時。離生喜樂。能增廣未至彼岸。身離生喜樂。爾時名遍住禪時。離生喜樂。能到彼岸。齊是謂身離生喜樂。爾時名滿。如農夫初以水溉田地。始津潤名津。潤已水漸開微行未能增廣名液。液已水漸增廣未到彼岸名遍。……能增廣未到彼岸。身離生喜樂。爾時名遍。離生喜樂。能至彼岸。齊是謂離生喜樂。爾時名身滿。」(T28, 621c23-622a10) とあり、本箇所を参照したものとみられる。
- 11) 「〔云何遍〕 - 【甲】」。
- 12) 曇摩耶舍共曇摩崛多等訳『舍利弗阿毘曇論』卷第十四に「復次津液遍滿。如是諸句。義一名異。如佛說此苦聖諦法未曾聞自思惟。生智生眼生覺生明生通生慧生解。諸比丘此不應如是說。謂智異眼異覺異明異通異慧異解異。」(T28, 623c8-12) とあり、本箇所を参照したものとみられる。
- 13) 「〔言〕 - 【甲】」。
- 14) 鳩摩羅什訳『大智度論』卷第五に「經悉是五⁴⁰通。論如⁴¹意天眼天⁴²耳他心智自識宿命。」[97n40 : 通 + (者)【宋】【宮】【聖】【石】、n41 : 意 + (足)【石】、n42 : 耳 + (知)【聖】](T25, 97c21-22) とあり、本箇所を指すものとみられる。
- 15) 求那跋摩訳『菩薩善戒經』卷第二に「云何六通。神足天耳天眼他心智宿命智漏盡智。」(T30, 971b23-24) とあり、本箇所を参照したものとみられる。なお、(擬題)『無量壽觀經義記』(S.327)に「六通者。一神足通。二天眼通。三天耳通。四他心通。五宿命通。六漏盡通。」(T85, 251a2-4) とあり、類似する文例がみられる。S.327 (無量壽觀經續述) については、櫻井唯2020「紀國寺慧浄の著作について」『論叢アジアの文化と思想』28 : 48-51に閑説されているため、そちらを参照されたい。
- 16) 「測 = 側【甲】」。
- 17) 「天是 = 是天【甲】」。
- 18) 「〔宿〕 - 【甲】」。
- 19) 「〔性〕 - 【甲】」。
- 20) 「名 = 曰【甲】」。
- 21) 「〔漏涅槃名〕 - 【甲】」。
- 22) 「測 = 側【甲】」。
- 23) 「神 = 身【甲】」。
- 24) 「〔眼〕 - 【甲】」。
- 25) 玄奘訳『阿毘達磨大毘婆沙論』卷第三十には「天眼天耳是通果故亦說名通。」(T27, 175b12-13) と、浮陀跋摩共道泰等訳『阿毘曇毘婆沙論』卷第十八には「如天眼天耳是通果。以通名說。」(T28, 132c27-28) とあり、新訳により近いことが分かる。仮に玄奘訳だとすれば、『續述』は659年7月3日以降の述

作ということになろうか。

- 26) 「〔生意地〕 - 【甲】」。
- 27) 「雜心續述」については、前掲の櫻井唯 [2020 : 7-8] を参照されたい。
- 28) 「命通 = 通_レ命 【甲】*」。
- 29) 「盡 + (通) 【甲】」。
- 30) 「(者若以緣盡) + 爲 【甲】」。
- 31) 「(漏) + 盡 【甲】」。
- 32) 櫻井唯2017「初唐の異国僧：長耳三蔵とその思想」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』62 : 893及び
櫻井唯2019「紀国寺慧浄と長耳三蔵の接点：『大智度論』をめぐって」『東アジア仏教研究』17 : 91に
「五神通」として関説されている。
- 33) 「靈仙 = 仙_レ靈 【甲】」。
- 34) 「〔離〕 - 【甲】」。
- 35) 「〔影〕 - 【甲】」。
- 36) 「〔時〕 - 【甲】」。
- 37) 「〔離自地欲時得是離翳障離上地欲時得是離影障〕 二十字 - 【甲】」。
- 38) 僧伽跋摩等訳『雜阿毘曇心論』卷第七に「此無記性故。不入淨無漏味相應。是故得彼三種禪時。不得
作方便已乃現在前。」(T28, 929a2-4) とある。
- 39) 鳩摩羅什訳『成実論』卷第四に「答曰。世障故不見。如過去未來色。映勝故不見。」(T32, 269a9-10)
とある。
- 40) 「〔知〕 - 【甲】」。
- 41) 「離 = 病 【甲】」。
- 42) 「〔一〕 - 【甲】」。
- 43) 「〔通〕 - 【甲】」。
- 44) 真諦訳『阿毘達磨俱舍積論』卷第二十に「偈曰。曾悉離得。釋曰。此五通慧。若餘生所數習。則由離
欲得。若別勝由修行得。一切皆由修行得生。」(T29, 294b5-7) とある。
- 45) 「〔得〕 - 【甲】」。
- 46) 「〔得〕 - 【甲】」。
- 47) 「一向 = 而 【甲】」。
- 48) 「遠近 = 近遠 【甲】*」。
- 49) 「捫日 = 捫莫日月 【甲】」。「莫」は「摸」の誤りか。
- 50) 「變三 = 處二 【甲】」。
- 51) 「〔三〕 - 【甲】」。
- 52) 「〔變〕 - 【甲】」。

- 53) 「遍 = 遍【甲】」。
- 54) 「法本門中六 = 本法【甲】」。
- 55) 「五暗取明暗 = 取暗【甲】」。
- 56) 「〔取暗明〕 - 【甲】」。
- 57) 「〔欲〕 - 【甲】」。
- 58) 「〔一〕 - 【甲】」。
- 59) 「孔 = 吼【甲】」。
- 60) 「響 = 嚮【甲】」。
- 61) 「〔三等遍震〕 - 【甲】」。
- 62) 「〔二非因受四大聲〕 - 【甲】」。
- 63) 「〔後七前中取後八後取前中九後中取前〕十六字 - 【甲】」。
- 64) 「中復 = 復中【甲】」。
- 65) 「姓 = 性【甲】」。
- 66) 「十 + (八)【甲】」。
- 67) 「示 = 永【甲】」。
- 68) 曇摩伽陀耶舍訳『無量義經』に「大哉大悟大聖主 無垢無染無所著 天人象馬調御師 道風德香熏一切」(T9, 384c29-385a1) とあり、本箇所を引用したものとみられる。
- 69) 「〔深〕 - 【甲】」。
- 70) 「壤 = 性【甲】」。
- 71) 「〔初偈〕 - 【甲】」。
- 72) 栖復集『法華經玄贊要集』卷第十三に「經云。又見佛子等者。又見佛子者。能化人。定慧具足者。圓力化。以無量喻者。開解化。爲衆講法者。上首化。忻樂說法者。不退化。化諸菩薩者。簡機化。破魔兵衆者。降魔化。而擊法鼓者。法遠聞化。」(X34, 475b3-7) とあり、ほぼ一致する文例がみられる。典拠を明かさない『續述』の引用であろう。とりわけ「又見佛子者。能化人」という一文は、韓国の現存本と敦煌本の両方に欠く『續述』の逸文であろうか。
- 73) 「〔化〕 - 【甲】」。
- 74) 「化次 = 次化【甲】」。
- 75) 栖復集『法華經玄贊要集』卷第十三に「經云。又見菩薩者捨樂人寂然。宴默者捨樂相。身心不動。名寂然。口不動名宴默。或心不動名宴。語不動名默。天龍恭敬者。遇樂境不以爲喜者。捨樂心。」(X34, 476b21-24) とあり、ほぼ一致する文例がみられる。典拠を明かさない『續述』の引用であろう。
- 76) 「嘿 = 默【甲】」。
- 77) 「〔者〕 - 【甲】」。
- 78) 栖復集『法華經玄贊要集』卷第十三に「經云。又見菩薩者拔苦人。處林放光者拔苦力。濟地獄苦者拔

苦事。令入佛道者與其樂。」(X34, 476c24-477a2)とあり、ほぼ一致する文例がみられる。典拠を明かさ
ない『續述』の引用であろう。

79) 栖復集『法華經玄贊要集』卷第十三に「經云。又見佛子者精進人未嘗睡眠者。除精進障。經行林中者。現精進相。勤求佛道者。覓精進果。」(X34, 477b1-3)とあり、ほぼ一致する文例がみられる。典拠
を明かさない『續述』の引用であろう。

80) 「佛子=菩薩【甲】」。

81) 「舉+(精)【甲】」。

82) 「勤=勸【甲】【妙】」。「妙」は『妙法蓮華經』のこと(以下同様)。

83) 「覓=覓【甲】」。

84) 僧伽婆羅譯『解脫道論』卷第四に「睡眠者。謂身悶重欲得寤寐。眠有三種。一從食生。二從時節生。三從心生。若從心生以思惟斷。若從飲食及時節生。是羅漢眠不從心生無所蓋故。若眠從食及時節生者。以精進能斷。如阿菴樓駄所說。我初盡漏得不從心眠。于今五十五歲。於其中間斷食時節臥已二十五年。」(T32, 416b9-16)とあり、本箇所を参照したものとみられる。

85) 「(五)+年【甲】【解】」。「解」は『解脫道論』のこと。

86) 栖復集『法華經玄贊要集』卷第十三に「紀國云。又見具戒者。持戒人。威儀無缺者持戒相。淨如寶珠者。顯戒德。以求佛道者。顯戒果。」(X34, 478c8-10)とある。「殊」は「珠」の誤りであり、「顯」は「覓」の誤りであろうか。

87) 「戒+(足)【甲】」。

88) 曇無讖譯『菩薩地持經』卷第四に「¹⁴云何自性¹⁵戒。略說四德成就。¹⁶是名自性戒。云何爲四。一者從他正受。二者善淨心¹⁷受。三者¹⁸犯已即¹⁹悔。四者專精念住²⁰堅持不犯。」(910n14:〔云何〕-【三】【宮】【聖】【知】、n15:戒+(者)【三】【宮】【聖】【知】、n16:〔是〕-【三】【宮】、n17:〔受〕-【三】【宮】【聖】【知】、n18:犯已=若犯【三】【宮】*、n19:悔=懺【三】【宮】*、n20:(從初)+堅【三】【宮】)(T30, 910a17-20)とあり、本箇所を参照したものとみられる。

89) 「正=心【甲】」。

90) 真諦譯『撰大乘論釈』卷第十一に「論曰。品類差別者有三種。一攝正護戒 釋曰。⁵謂比丘比丘尼。式又摩尼沙彌沙彌尼。優婆塞優婆夷。此戒是在家出家二部七衆所持戒 論曰。二攝善法戒 釋曰。從受正護戒。後爲得大菩提。菩薩生長一切善法。謂聞思修慧及身口意善。乃至十波羅蜜 論曰。三攝衆生利益戒 釋曰。略說有四種。謂隨衆生根性。安立衆生於善道及三乘。」(232n5:謂=論【三】【宮】)(T31, 232b5-13)とあり、本箇所を参照したものとみられる。

91) 真諦譯『撰大乘論釈』卷第十一に「此三種戒以何法爲因。三根爲別因。二根爲通因。三根爲別因者。精進根爲第一戒因。智根爲第二戒因。定根爲第三戒因。二根爲通因者。信念二根通爲三戒因。」(T31, 232c1-5)とあり、本箇所を参照したものとみられる。

92) 「攝+(正)【甲】」。

- 93) 「攝 + (衆) 【甲】」。
- 94) 「或以 = 以戒 【甲】」。
- 95) 「或 = 戒 【甲】」。
- 96) 「(惡) + 所 【甲】」。
- 97) 「以 + (是) 【甲】」。
- 98) 「〔能〕 - 【甲】」。
- 99) 「〔所〕 - 【甲】」。
- 100) 波羅頗蜜多羅訳『大乘莊嚴經論』卷第八に「菩薩有三聚戒。一律儀戒。二攝善法戒。三攝衆生戒。初戒以禁防爲體。後二戒以勤勇爲體。」(T31, 630c13-15) とある。
- 101) 「就 = 熟 【甲】*」。
- 102) 僧伽婆羅訳『解脫道論』卷第一に「何戒相者。威儀除非威儀。問云何名非威儀。答謂破法。破法有三種。一破波羅提木叉法。二破緣法。三破根法。云何破波羅提木叉法。謂無慚無愧。於如來離信云何破緣法。答命與形飾相應離於知足。云何破根法。不閉六根門離於念慧。以此三覆非威儀。是名戒相。」(T32, 400c26-401a3) とある。慧浄の経論引用が取捨選択による恣意的なものであることを物語る、その顕著な例として指摘することができる。
- 103) 「又 = 又 【甲】」。
- 104) 典拠不明であるが、真諦訳『律二十二明了論』に「如不閉戸共非大戒眠等」(T24, 666b20-21) とあり、類似する文例がみられる。
- 105) 「〔意欲失〕 - 【甲】」。
- 106) 「〔如爲〕 - 【甲】」。
- 107) 「具 = 其 【甲】」。
- 108) 「輕輕 = 種種 【甲】」。
- 109) 曇無讖訳『菩薩地持經』卷第五に「◎²⁰如是菩薩住律儀戒²¹者。有四波羅夷處法。何等爲四。菩薩爲貪利故自歎己德毀²²他人。是名第一波羅夷處²²法。菩薩自有財物。性慳惜故。貧苦衆生無所依怙來²³求索者。不起悲心給施所求。有欲聞法慳惜不說。是名第二波羅夷處²⁴法。菩薩瞋恚。出僂惡言意猶不息。復以手打或加杖石。殘害恐怖瞋²⁶恨增上。²⁷犯者求悔不受其懺。結恨不捨。是名第三波羅夷處法。菩薩²⁸謗菩薩藏說。相似²⁹法³⁰熾然建立³¹於相似法。若心自解或從³²他受。是名第四波羅夷處法。³³是名菩薩四波羅夷處法」[913n20 : 卷第五菩薩地持方便處戒品之餘首 【聖】 【知】、〔如是菩薩〕 - 【三】 【宮】、n21 : 者 = 菩薩 【三】 【宮】、n22 : 法 + (先經曰自歎得菩薩戒住菩薩地也) 夾註 【三】 【宮】、n23 : 求索者 = 從索者 【三】 【宮】、n24 : 法 + (先經曰不施乃至一錢不施乃至一偈也) 夾註 【三】 【宮】、n25 : 薩 + (橫生) 【三】 【宮】、n26 : 恨 = 恚 【三】 【宮】、n27 : 犯者求悔 = 前人懺謝 【三】 【知】、n28 : (誹) + 謗 【三】 【宮】、n29 : 法 + (於相似法) 【三】 【宮】、n30 : [熾然建立] - 【聖】、n31 : 於相似法若心自解或 = 若自心解若 【三】 【宮】、〔於〕 - 【聖】、n32 : 他 = 地 【聖】、n33 : (是名…夷處) 十九字 = 菩薩於此四

【三】【宮】(T30, 913b1-12) とある。

110) 「嘆=歎【甲】【地】」。【地】は『菩薩地持經』のこと(以下同様)。

111) 「善=若【甲】」。

112) 求那跋摩訳『菩薩善戒經』(卷第十)に「菩薩有二種。一者在家。二者出家。在家六重。出家八重。」(T30, 1015a16-18) とある。

113) 曇無讖訳『菩薩地持經』卷第五に「有二因緣。⁴⁶失菩薩律儀戒。一者捨無上菩提願。二者起增上煩惱。犯無有捨身受身。⁴⁶失善³⁶薩戒。乃至十方在所受生。亦復⁴⁹不失。若菩薩不捨大願。非上煩惱犯。捨身受身。雖不⁵⁰憶念。從善知識。數數更受猶是本戒。不名新得」(913n46: 失=捨菩薩【三】【宮】*、912n36: 薩+(律儀)【三】【宮】*、913n49: 不失=如是【三】【宮】、n50: 憶=億【明】)(T30, 913b22-27) とある。

114) 求那跋摩訳『菩薩善戒經』(卷第十)に「菩薩若犯比丘四重。亦失波羅提木叉戒。汚菩薩戒。」(T30, 1015a28-29) とある。

115) 前掲の注『大乘莊嚴經論』卷第八(T31, 630c13-15) 参照。

116) 「〔善攝〕-【甲】」。

117) 曇無讖訳『菩薩地持經』卷第五に「若菩薩住律儀戒。⁵⁴於一日一夜中。若佛在世若佛塔廟。若法若經卷若菩薩修多羅藏。若菩薩摩¹⁰得勒伽藏若比丘僧。若⁵⁵十方世界大菩薩衆。若不少多供養乃至一禮。⁵⁶乃至不以一偈讚歎三寶功德。乃至不能一念淨心者。是名爲犯衆多犯。⁵⁷若不恭敬。若懶惰。若懈怠犯。⁵⁸是犯染汚起。若忘誤犯。非染汚起。」(913n53: 〔若菩薩〕-【三】【宮】、n54: (於一…廟)十四字=(菩薩於佛若佛塔)七字【三】【宮】、n10: 得=德【三】【宮】*、n55: (十方…多)十二字=(大菩薩衆若不恭敬懶惰若懈怠於一日一夜不修)二十字【三】【宮】、n56: (乃至)-【三】【宮】、n57: (若不…犯)十一字-【三】【宮】、n58: (是犯)-【聖】【知】)(T30, 913c1-8) とある。

118) 「嬾=懶【甲】【地】」。

119) 「誤=悞【甲】【地】」。

120) 典拠不明。『大乘莊嚴經論』のことか。

121) 栖復集『法華經玄贊要集』卷第十三に「今取圓者。珠以無翳無瑕爲淨。或以無缺無減爲淨。又或有三者。清淨如珠。二圓滿如珠。三可重如珠。」(X34, 478c17-19) とあり、類似する文例がみられる。「或」は「戒」の誤りであろうか。おそらく『續述』の影響によるものであろう。

122) 栖復集『法華經玄贊要集』卷第十三に「紀國云。又見佛子者。住忍人。注忍辱力者。安忍地。增上慢人惡罵捶打者。遇忍境。皆悉能忍者。現忍力。以求佛道者。覓忍果。」(X34, 479c6-8) とある。「注」は「住」の誤りであろう。

123) 吉藏撰『法華義疏』卷第二に「阿含經云有六種力。小兒以啼爲力。欲有所索要必先啼。女人以瞋爲力。欲有所索要必前瞋。國王以僑豪爲力。羅漢以精進爲力。諸佛以大悲爲力。比丘以忍辱爲力。」(T34, 475c5-9) とあり、ここから引用したものとみられる。なお、「阿含經云」は、瞿曇僧伽提婆訳『增一阿

含經』卷第三十一（T2, 717b18-27）に該当する。

また、文軌撰『天請問經疏』に「《阿含經》云¹²有六種力：小兒以啼為力，欲有所索，必先啼故；女人以瞋為力，欲有所索，必先瞋故；國王以嬌豪為力；阿¹羅漢以精進為力；諸佛²以大悲³為力；比丘以忍為力。」[76n12：「云」，甲本無。77n1：「阿」，甲本無。n2：「佛」，甲本無。n3：「悲」，甲本作「慈悲」。]（ZW1, 76a12-77a2）とあり、これは『續述』を引用したものと考えられる。

124) 「大+（慈）【甲】」。

125) 波羅頗蜜多羅訳『大乘莊嚴經論』卷第八に「彼三種者。是忍品類。彼人有三品。一他毀忍。二安苦忍。三觀法忍故。」（T31, 629c23-24）とある。

また、文軌撰『天請問經疏』に「《莊嚴論》說忍有三種：一、他毀忍，以不報為性；二、安苦忍，以耐為性；三、觀解忍，以智為性。今此正明他毀辱忍¹。此忍²得起，由三思、五想³。三思者，一思⁴他毀是我自業，若報則⁵重自造苦，不由於他。二思彼我俱是行苦。彼以無智⁶，於苦加⁷苦；我今有智，云何復爾！三思聲聞自利，尚不以苦加⁸人；菩薩利他，豈得以苦加物？五想者，一修本親想，捨願想。一切眾生，久來無非親屬故。二修法想，離生想。罵者、打者不可得故。三修無常想，離常想。眾生性是死法，尚不應瞋⁹，況加害故。四修苦想，離樂想。眾生不離三苦，正¹⁰應令離，不應加故。五修攝取想，離¹¹他想。本願令樂，不令苦故。由此三思、五想，於他毀辱，便能忍之。」[75n10：「新福不生」，甲本作「新福不生，舊福不生」。76n1：「辱忍」，底本作「忍辱」，據甲本改。n2：「忍」，甲本無。n3：「想」，底本作「相」，據甲本改。n4：「一思」，甲本無。n5：「則」，底本作「即」，據甲本改。n6：「智」，甲本作「知」。下同。n7：「加」，底本作「加加」，據甲本刪。n8：「加」，底本作「加行」，據甲本刪。n9：「瞋」，甲本無。n10：「正」，甲本作「止」。n11：「離」，甲本無。」（ZW1, 76a1-11）とあり、前掲の注『天請問經疏』（ZW1, 76a12-77a2）のように、これも『續述』を引用したものと考えられる。

なお、法蔵述『華嚴經探玄記』卷第六（T35, 221b3-14）及び表貝集『華嚴經文義要決問答』卷第四（X8, 441c19-442a3）においてもほぼ同文が引かれていることから、その後の展開についても考察し得る文例になると考えられる。

126) 「惡罵=罵詈【甲】*」。

127) 智度述『天台法華疏義續』卷第三本に「惡罵是口業捶打是身業」（X29, 40a11）とあり、類似する文例がみられる。

128) 「想=相【甲】*」。

129) 栖復集『法華經玄贊要集』卷第十三に「言二頌定者。紀國云。初一頌離亂相。後一頌現定相。經云。又見菩薩者。亂人離諸戲笑者。離亂事。及癡眷屬者。離亂因。親近智者。狎定緣。一心除亂。攝念山林者。現定相。億千萬歲者。積定力。以求佛道者。覓定果。」（X34, 480b9-12）とある。『要集』の『續述』に対する引用態度（有改変）が窺われる。「覓」は「覺」の誤りであろう。

130) 「〔者〕-【甲】」。

131) 「相=想【甲】」。

- 132) 「擅 = 擅【甲】」。
- 133) 吉蔵撰『法華義疏』卷第二に「開爲五別。一明藥食施。二明衣服施。三明臥具施。四明園林施。五一偈總結施意。」(T34, 475c25-27) とあり、本箇所を参照したものとみられる。
- 134) 「〔飲〕 - 【甲】」。
- 135) 『小爾雅』のことか。
- 136) 吉蔵撰『法華義疏』卷第二に「涅槃四相品去已斷肉。至大衆問品純陀持諸餽饈來者。爲純陀從哀歎品還家不聞四相品制故。」(T34, 475c29-476a2) とあり、本箇所を参照したものとみられる。
- 137) 吉蔵撰『法華義疏』卷第二に「名衣上服價直千萬者。迦葉袈裟直十萬兩金。以施佛。祇域奉佛染摩羯簸衣亦堪十萬兩金。佛勅阿難割截作袈裟耳。」(T34, 476a3-6) とあり、本箇所を参照したものとみられる。
- 138) 「〔土〕 - 【甲】」。
- 139) 「袈 = 迦【甲】」。
- 140) 「眞 = 一直【甲】」。
- 141) 「染 = 深【甲】」。
- 142) 吉蔵撰『法華義疏』のこと。
- 143) 「餘文 = 又【甲】」。
- 144) 「〔性〕 - 【甲】」。
- 145) 「詔 = 照【甲】」。
- 146) 波羅頗蜜多羅訳『大乘莊嚴經論』卷第五に「若無性則無生。若無生則無滅。若無³滅則本來寂靜。若本來寂靜則自性涅槃。如是前前次第爲後後依止。此義得成。」[615n3 : (生) + 滅【三】【宮】] (T31, 615a17-20) とあり、本箇所を引用したものとみられる。
- 147) 「〔若無生滅〕 - 【甲】」。
- 148) 「寂 + (滅)【甲】」削除記号あり。
- 149) 「〔後〕 - 【甲】」。
- 150) 鳩摩羅什訳『大智度論』卷三十二に「行是如已入無量法性中。法性者法名涅槃。不可壞不可戲論。法性名⁶爲本分種。」[298n6 : 〔爲〕 - 【三】【宮】] (T25, 298b18-20) とあり、本箇所を参照したものとみられる。
- 151) 波羅頗蜜多羅訳『大乘莊嚴經論』卷第二に「無二義是第一義。五種示現。非有者。分別依他二相無故非無者。眞實相有故。非如者。分別依他二相無一實體故。非異者。彼二種如無異體故。非生非滅者。¹¹無爲故。非增非減者。淨染二分起時滅時法界正如是住故。非淨者。自性無染不須淨故。非不淨者。客塵去故。如是五種無二相。是第一義相應知。」[598n11 : 無爲. Anabhisamkṛiatva.] (T31, 598b 24-c1) とあり、本箇所を参照したものとみられる。
- 152) 「増 = 憎【甲】」。

- 153) 「靜=淨【甲】」。
- 154) 基撰『妙法蓮華經玄贊』卷第三本に「論云諸著者。彼彼處著。或著界著地著分著乘。」(T34, 699b 29-c1)とあり、同文がみられる。おそらく『續述』の影響によるものであろう。もとは、菩提流支訳『妙法蓮華經優波提舍』に「諸著處者。彼處處著。或著諸界。或著諸地。或著諸分。或著諸乘故。」(16r10-v1)とある。
- 155) 「則=即【甲】」。
- 156) 吉蔵撰『法華義疏』卷第二に「如釋迦入涅槃後。從娑羅雙樹舉佛尸。於天冠寺七日供養佛全身。待迦葉來七日後方闍維之。供養碎身方乃起塔供養也。」(T34, 476b13-16)とあり、本箇所を参照したものとみられる。
- 157) 「〔後〕 - 【甲】」。
- 158) 吉蔵撰『法華義疏』のこと。
- 159) 「〔頌〕 - 【甲】」。
- 160) 吉蔵撰『法華義疏』卷第二に「華開本爲結實。而樹自然莊嚴。起塔本爲供養佛身。國土自然華麗也」(T34, 476c2-3)とあり、本箇所を参照したものとみられる。
- 161) 「〔養〕 - 【甲】」。
- 162) 「意=實【甲】」。
- 163) 「〔問〕 - 【甲】」。
- 164) 失訳『別訳雜阿含經』卷第三に「唯願爲我法衆疑」(T2, 389a4)とあり、類似する文例がみられる。
- 165) 「村=恃【甲】」。
- 166) 「〔答〕 + 云【甲】」。
- 167) 「爾=是【甲】」。『法華義記』『妙法蓮華經文句』『添品妙法蓮華經』でも同様であるため、古に「是」であったことが、又はかような異本のあったことが推察されよう。
- 168) 「以=次【甲】」。
- 169) 「頌+ (説)【甲】」。
- 170) 菩提流支訳『妙法蓮華經優波提舍』に「自此已下明聖者。文殊師利菩薩以宿命智現見過去因相果相成就十種事如現在前。是故能答彌勒菩薩。現見過去因相者。文殊師利自見己身。曾於彼諸佛國土中修種種行事故。現見過去果相者。文殊師利自見己身。是過去世妙光菩薩。於彼佛所聞此法門爲衆生說故。」(10v1-6)とあり、本箇所を参照したものとみられる。
- 171) 「〔彼〕 - 【甲】」。
- 172) 義寂釈義一撰『法華經論述記』に「成就十事。四重分別。一舉名。二釋義。三開章。四合解。第一舉名。如文中列。」(X46, 791b3-5)とあり、典拠を明かさない『續述』の引用であろう。
- 173) 菩提流支訳『妙法蓮華經優波提舍』に「成就十種事者。何等爲十。一者現見大義因成就。二者現見世間文字章句甚深意因成就。三者現見希有因成就。四者現見勝妙因成就。五者現見受用大因成就。六者

現見攝取一切諸佛轉法輪因成就。七者現見善堅實如來法輪因成就。八者現見能進入因成就。九者現見憶念因成就。十者現見自身所逕事因成就。」(10v6-11r2) とある。

174) 「(諸取) + 諸【甲】」。

175) 「堅 = 賢【甲】」。

176) 義寂積義一撰『法華經論述記』に「釋義者。一大義者。記恩義大故。如來以大恩義。欲說大法故。二世間文字意甚深因成就者。佛說三乘。有字無義。言近意遠。名之爲甚深。」(X46, 791b3-5) とあり、典拠を明かさない『續述』の引用であろう。とりわけこは、前掲の注も含めて地の文として取り込まれているところが注目される。『續述』と『法華經論述記』の関係については、金炳坤2014「義寂積義一撰『法華經論述記』について」『印度学仏教学研究』63-1: 510-505を参照されたい。

177) 円弘注『妙法蓮華經論子注』上巻に「一切言說皆依世間。此言文字。即三乘文字雖說三乘意。顯一乘言近意遠。世間難信故言甚深意。」(27r8-9) とあり、文意において通ずるものがある。

178) 求那跋陀羅訳『勝鬘師子吼一乘大方便方廣經』に「於無常壞世間。³無常病世間。」(220n3: (於) + 無【三】【宮】) (T12, 220b6-7) とあり、本箇所を参照したものとみられる。

179) 円弘注『妙法蓮華經論子注』上巻に「此法甚深說人難值。經無量劫。或聞不聞。故曰希有也。」(27r9-10) とあり、同文がみられる。また、義寂積義一撰『法華經論述記』に「淨法師云。此法說人難值。經無量劫。或不聞故。曰希有。」(X46, 791b11-12) とあり、『續述』の引用がみられる。

180) 「〔經〕 - 【甲】」。

181) 円弘注『妙法蓮華經論子注』上巻に「二萬諸佛次第共宣。宣人既多。是故此法勝妙也。」(27r11) とあり、類似する文例がみられる。

182) 「〔就〕 - 【甲】」。

183) 「經 = 法【甲】」。

184) 円弘注『妙法蓮華經論子注』上巻に「六十劫中。弘法壞法。弘壞時長。故曰受用大。」(27r12) とあり、類似する文例がみられる。

185) 「(輪者) + 妙【甲】」。

186) 円弘注『妙法蓮華經論子注』上巻に「長時說故令八子不退。故言善堅實也。」(27r15) とあり、類似する文例がみられる。

187) 円弘注『妙法蓮華經論子注』上巻に「非但不退更階上果。故曰能進入。」(27r16) とあり、ほぼ一致する文例がみられる。

188) 円弘注『妙法蓮華經論子注』上巻に「求名忘本因說更憶。故言憶念也。」(27r17) とあり、類似する文例がみられる。

189) 円弘注『妙法蓮華經論子注』上巻に「由昔脩行今成己身是故。昔日妙光。即是今日文殊。曾所逕事。故言自身等。」(27r18-19) とあり、類似する文例がみられる。

190) 「名 + (曰)【甲】」。

191) 義寂積義一撰『法華經論述記』に「浄師云。因成就者。由文殊見昔十事爲答。彌力之因。見之自在。

故言成就也。」（X46, 791b24-c2）とあり、『續述』の引用がみられる。「力」は「勒」の誤りであろう。

192) 「是=爾【妙】」。

193) 「〔明〕 - 【甲】」。

194) 「以下闕【甲】」。

〈キーワード〉長耳三蔵、文軌、道栄、道策、利涉、行賀、円弘、栖復、天請問經疏、妙法蓮華經論子注、法華疏、法華經玄賛要集、BD03215